海外協定校長期派遣留学報告書

氏名：山本　真結

学部学科名：国際食料情報学部食料環境経済学科

留学先学校名：IPB 大学（インドネシア）

1.留学の目的

英語能力の向上とインドネシア語の習得、卒業論文の研究で農村調査を行うこと、及びイスラム教文化への理解を深めること。

2. 現地での生活について

（住居、キャンパス、友達との交流、余暇の過ごし方など）

始めの学期(Odd Semester)は別の大学からの日本人留学生が多く、10 人以上いたため、生活の面で非常に助けられていました。例えば、夜ご飯で一緒に炊き込みご飯や肉じゃがなどの日本食を作ったり、体調が悪い時に代わりに買い物に行ってポカリやゼリーなどを買ってきてくれたりしました。また、大学のイベントでは日本人チームとしてパフォーマンスしたり日本の文化や自分たちの大学について教えたりする機会もありました。授業があるのは週 3〜4 日で、それ以外の休みの日にはバリやジョグジャカルタ、ジャカルタなどに遊びに行ったり、ボゴールの中心地にあるショッピングモールへ映画を観に行ったりしました。普段のスーパーへの買い物も、日本人と一緒に行くことが多かったです。

後半(Even Semester)は、前期の反省として、同じ寮にいる日本人や他の国の留学生とは交流があったものの、現地のインドネシア人との交流が希薄だったため、インドネシア語の授業や研究活動で積極的にインドネシア人と関わって、インドネシア語を習得することに力を入れていました。インドネシア語の授業は、インドネシア人や他の留学生とほとんど英語で会話していましたが、留学前に農大でインドネシア語の授業を受けていた時よりも、インドネシア語の勉強が簡単に感じました。普段の生活で、買い物をしたりタクシーに乗ったりする時に、インドネシア人に間違われることが多かったため、どこまで英語を使わずにインドネシア語で会話できるかをよく試していました。インドネシア語の授業は、英語があまり得意でない先生と学生から学んでいたため、感覚的な理解を求められることがよくありましたが、私にはそのやり方が合っていたため、楽しく実用的に勉強できたような気がします。

後半の学期は、私の他にもう一人日本人がいましたが、私が普段よく話していたのはベトナム人とインド人、韓国人の女の子でした。また、インドネシア語の授業を一緒に受けていたインドネシア人の友達とご飯を食べたり、卒論調査で同行してもらっていた別のキャンパス(Sekolah Vokasi)の KlikBi という研究室の学生と交流したりすることもよくありました。2 月の断食が始まる前に、KlikBi の食事会に誘ってもらい参加したこともありました。断食前夜にみんなで集まって 1 日食事するというイスラム教の文化を教えてもらいました。前期に比べて一人で行動することが増えたため、遊びに行く頻度は減りましたが、その分卒論研究や普段の勉強にかける時間が増えました。他にも、International Student Forum というイベント

で、日本の教育についてプレゼン発表したことも印象に残っています。留学生から選ばれた 5 人の代表の一人として、自分のこれまでの教育環境について 15 分発表しました。私の通っていた中高は国際交流に力を入れていて、英語の授業も全て英語で行っていることを紹介すると、IPB の International Student Office の職員の方が興味を持ってくださり、私の学校と繋げてほしいと言われました。他にも、このイベントに参加していた学生が、プレゼン発表の内容が個性的で面白かったと伝えてくれました。このイベントの依頼が来た時は、試験勉強や卒論調査、授業の課題、ISS の準備などに追われていて忙しく断るか悩んでいたのですが、私の体験談に興味を示してくれたことに喜びを感じ、引き受けてよかったと感じました。

寮は、一時的に停電したり、シャワーの水量が極端に少なくなったり、茶色の水が出てきたり、お湯が出ない日があったり、共用キッチンのコンロが壊れて使えなくなったり、冷蔵庫が壊れて食べ物が腐ったり、寮に虫が大量発生したり、洗濯物として出した洋服やタオルのタグに勝手に部屋番号を書かれたり、天井からヤモリが降ってきたり、部屋に常に 3 種類くらいのアリがいたり、雷が落ちたりヘリコプターが上空を通ったりする度に部屋が揺れたり、湿度が高くて持ち物にすぐカビが生えたり、小さな困りごとは数え切れないほど多くありました。よく食事をしていた大学の裏にある Bara という通りには、野良猫やネズミ、ゴキブリがたくさんいました。実際に、そこで買って食べたものが原因で体調不良になったことが何度もありました。
友達や家族に写真を見せると、「よくそんな場所で生活しているね」と言われることが何度もありましたが、日本での当たり前に便利で安全な生活とその環境に生まれたことに感謝できるようになったことと、このような側面も経験として楽しんでいたという意味で、私はポジティブに捉えています。そして、インドネシアを選んで外国人として生活している立場を理解して、これらをあまりネガティブなこととして嫌悪しすぎないことも意識していました。

3. 留学を通じて学んだこと

今回の留学は、私にとって三度目の海外渡航でした。1 年生の夏休みに短期派遣でケニアへ 3 週間弱、2 年生の春休みにインターンシップでオーストラリアに 1 か月訪問した経験があり、海外への渡航は比較的慣れていましたが、これまでの留学経験とは全く異なるものでした。それは、異なる文化や価値観を体験するだけでなく、それらを通して自己理解が深まったという点においてです。

インドネシアで感じたカルチャーショックの中で最も印象深いのは、時間に対する考えの違いです。先生が連絡なしに授業に 30 分遅刻したり、授業直前に講義時間や場所の変更連絡が届いたりすることが日常的にありました。特にストレスを感じていたのは試験期間中で、試験直前になっても講義資料が揃わず勉強したくてもできないという状況に直面しました。学生ポータルに載っている資料はインドネシア語のものだけで、先生に直接請求しないと英語の資料が共有されないため、何度も先生やクラスのリーダーにお願いしていました。時間や期限にルーズであることは、これまでの渡航先でも感じていたことです。しかし、このような不便が日常生活で頻繁に発生すると、「日本とは違う文化なのだ」と思うことだけでは消化しきれ

ないものがありました。1 年間留学生として生活するうえで、この国にお邪魔しているのだというつもりでインドネシアの文化を尊敬する気持ちを忘れないように心がけていましたが、先生も生徒も、時間に遅れて他人に迷惑をかけていてもそれを失礼なことだと認識していないように感じたため、その点において価値観の違いの理解に苦しみました。反対に、これだけは譲れないという自分の価値観のひとつだということに気が付くことができました。

次に、自分は無宗教であるというアイデンティティが確立したことも大きな成果です。日本で宗教について議論することは滅多にないですが、インドネシアでは多くの人と宗教について考える機会がありました。例えば、友達との会話で「どの宗教を信仰しているの？」と聞かれたのは、初めてでした。恋愛の話をしている時にも宗教の話が必ず出ます。
また、自分が無宗教であっても、イスラム教のお経のようなものが毎日聞こえたり、豚肉やアルコールを含む食品はスーパーで見かけなかったり、断食の期間中に飲食店が閉まっていたりしているのを日常的に触れることで、イスラム教と自分の文化との違いについて考えることが身近になりました。日本にいると無宗教であることが当たり前で、それを自分の特徴として捉える必要はなかったのだということにさえ、インドネシアで初めて自覚しました。しかし実際は、無宗教の日本人は人口の約 6 割です。私は、この数字にさえも衝撃を受けました。無宗教であることがそれほど当たり前ではないように思えます。自分の先祖が何かしらの宗教、例えば仏教や神道を信仰していても、それを知らない可能性すらあると考えさせられました。

そして、食についても、自分が生きていくうえで重要な幸せの要素であることを改めて痛感しました。短期派遣のケニアやオーストラリアでも日本食が恋しかったのですが、これまでとは異なり、インドネシアでは自分で食料を調達するようになって、お腹が空いて何か食べたいと思っても食べたいものがないと感じることが日常でした。最初の学期は、同じ寮に日本人が多くいたため一緒にお米を炊いたり日本食を作ったりして、日常的に自炊していたのですが、後半ひとりになってからは面倒になってあまり自炊しなくなってしまったことも原因かもしれません。特に、自炊よりもテイクアウトやデリバリー、外食の方が安く済んでしまうことも理由のひとつです。野菜を摂取することにも苦戦しました。日本に比べてスーパーに並ぶ野菜の種類が少なく、インドネシア料理に使われる野菜の量も少ないため、意識的に果物を食べるようにしたりビタミン剤を飲んだりすることもありました。今回の留学が初めての一人暮らしで、実家の生活への感謝を感じずにはいられませんでした。

また、季節の移り変わりが恋しく感じたことも印象的です。インドネシアは雨季と乾季の 2 つの季節で、特にボゴールは雨の町と言われ毎日雨が降るため、ほどんど 1 つの季節しかないような感覚でした。一方で日本は紅葉したり雪が降ったり桜が咲いたりしていて、その様子を家族や友達に見せてもらう度にいつも羨ましく思っていました。日本はハロウィンやクリスマス、お正月、バレンタインなど、商業的なイベントも含めて、季節を楽しんだり時の流れを感じたりするきっかけがたくさんあります。それが生活自体だけでなく心も豊かにしていたのだと恋しく感じま

した。

このような文化や価値観の違いを通して、ストレスを感じることも多かったのが本音ですが、それを通して自分の価値観を再認識したり日本での当たり前の生活に感謝したりできるようになることが留学の一番の目的でした。これを達成できたことに喜びを感じています。

4. 留学経験を今後どのように活かしていきたいか

まずは、インドネシアで行った農村調査を卒業論文として成果に残すことが目標です。農村調査を英語とインドネシア語で行ったため、卒業論文も英語で執筆しています。これは私にとって挑戦的なことですが、これまでの英語学習と大学での勉強の集大成として成し遂げたいことのひとつです。

また、言語学習に関して、IELTS のスコア向上とインドネシア語検定の取得も目標にしています。大学卒業後は、大学院に進学するため、その後の就職活動で自分の武器としてアピールできる客観的な成果も得たいと考えています。

そして、私が所属する地域社会経済研究室にいる 2 人の留学生との交流にも期待しています。私がインドネシアで農村調査をする上で、現地の人々の繋がりやサポートに多く助けられました。それを、今度は自分の身の回りの留学生に返していきたいです。

最後に、今回の長期留学を実現し支えてくださった全ての方に感謝いたします。留学中、普段の活動や卒論調査、大学内のイベントなど、多くの場面で、農大生として歓迎されたり共通の知り合いを通して紹介していただいたりする機会がありました。長期留学の制度自体はもちろん、農大と IPB との間に様々な繋がりがあったからこそ、その恩恵を受けることができたのだと確信しています。私も、その一部になれていれば幸いです。ありがとうございました。